

天津鞠韜謚心齋講錄

頊技之卷

翊翁抄

# 半捧術解説

此半捧と云ふ云々系と現在杖術と稱してある人もあるが  
古に於ては之を刀捧之法と古止文に残されてゐる

恐らく武器としては此半捧が最も最古である。説話の  
説に根の国の野郎で素直な鳴鶴が大国主を試す爲め四方  
の枯草に火をつけ野郎の草は忽ち火となつた時に大国主命  
は一本槍を拾つて此火を消ぎ倒し方がれた處へ一足の白鼠が来  
て命を救つたと又古止文に云雲武命が三足の捧刀を以て敵を  
退治したと見ても確に古に武器だと云ふ事が判り易い  
此の武器を使う法と預技之卷半捧と云ふの事があります。凡そ武  
道と云ふ事は宗門的妙術でなくも修行中に必ず経験する  
事と思ふが進歩は必ずしも同じ速なで行くものではないとす

或る時期は吾れに「不思議」なる程の進歩を見る事があるが  
或場合は丸で反対で此の身体は死物同様如何に努力しても  
あせつて少しも思ふ所に働かぬ事がある事がある  
それは多ク「一つの階段から更に上へ進む時期」に起る現象で例  
へば「技」で満足出来なく「精神」的方面を重んじて来る  
此の時期等の如く「技」の精神も重んずる令り「技」の實際と精神  
との調和がとれず「今迄」に「利」に「技」が利かなくなつたりする。之は  
修行途上の最も重大なる時期である。此となつて丸で「技」も「身」  
体も利がなくなつた頃から「智」を重んずると不思議に「身体」が「効」が  
自分の思ふ程な「技」が出来ない。悲観して「止」する者がある  
又宗門の「妙術」も「少」し「利」がなくなつて「悲観」のあまり「進」も「已  
れ」で「止」し、以て「進」め「ない」のだと思つて「信仰」も「失」ふ事がある時

期が来る又法だとか靈感だとか云ふもの正疑ふたふする事とて  
迷ふ心がある法とが靈感を疑ふ前に諸君はいろは四十八文  
字のゆに(う)と云ふ字が四十八文字の内何の書目にあるかと  
尋ねると誰れでもが始めからいろはと云ふて見よくは判らない  
でせう又一七八九の教を三で割る見よと云ふと諸君は直ぐ三  
一三と割算の九々の計算をするでせう之は何ぞの型でせう  
此型を得ればいろはをまとむでせう之ぞ此型の練習に務めが  
悟り得て始め完成するにすぎず何ぞ人問はずをまとむはな  
必ずまとむ。指古を忘りては駄目です之が練習中に必ずある現  
象でかかる場合よくそ鉄も貫く貫徹心と起す事です  
私に修養中一人の上希の柔道家と御す事だ日夜考へて  
三月目に於て御する中がまとむ。又天呂宗、僧門に有る時

京都の警憲寮から犯人と捜査する為に町に出入りに私は三千分間  
に於て犯人の身長歳頃逃走先を明確に的中する事一丁が此靈威  
を得る迄に山中の辨天堂に於て毎朝三時から寒中一尺の雪を  
りて精神の統一と修行した事一ヶ年です或時は絶食三週  
間病人に法を以てす事から今三身ぶづ者と救った事と  
あり鬼も角萬事に負く精神こそ所安であります

一筋に貫くに極意をぞと  
たゆまざるべし神の教と

翊翁

解 説

半捧は構無き構と云ふのでありまして、劔の如き敵と對抗して  
争ふ武畧ではあるのであります。即ち武器を以て構へず心の構  
であります。此半捧は最古の武畧ではありまが半捧術として  
完成したのは延元三年正月足利尊氏京都大軍を以て押寄の  
時官軍の結成親老の従者大國忠訓武方の足利方の  
剛傑八代權之守氏郷三尺八寸の軍刀にて味方に切込む  
此勢に當る可からざるを大國忠訓槍を以て立向にけるに  
忽ち八代氏郷の爲めに槍の真中より直三つに切折らるたり  
大國忠訓手に残りたる槍の柄三尺にて飛込みまゝ八代氏郷を  
一撃の之に刺し刀を抜つて其面を揚げてたり之より半捧術  
の完成と云ふに有り古止又一片の爲り也

心 之 構

一 型破構無構

之は棒の両端五寸内と持つてら面に両手落したるす

一 無心構無構

之は右の手に棒杖に突きたる姿の構

一 音無構無構

之は型破形の反対に棒の両端五寸内を両手に以て捧りはゆるりに持したる姿の構

之を三心の構とも云ふ也

### 初段 無心構無構

相手方片手にて我片胸襟を捕りて右手の小刀にて突き来る  
片手折我左足一步引き体を左斜に振りて右手とそのまゝ敵の

左手の左側になるくせりて同じに敵の左腕の中関節を捧  
中直にして突き折る

### 突落

相手方前と合しく左手の片約右手の小刀突入り来る

我前の一文子の捧其まゝ敵の左腕中関節に突入る  
のと左足引き一寸腰ぶらりものを同じに急ち左手放ちて

# 打技

左捧先敵の顔面に突入り

相手方小刀を以て我腹部と突入り来る  
我れ体と一歩左足左横へして体を転じ左手放ち左捧先  
敵の小手打込み其まゝ左横面打入り

# 流捕

相手方前と合点くりかにて我れが腹部に突入り来る我右足  
右横へ一歩削き体と転じ左手にて敵の小刀持つ右手面  
を握り右捧先と敵のほろ腰に持て行き右手と敵の  
右腕付根に持つて行き左足と右後ろ斜めに持つて  
行くと敵の右腕が捧の爲と左手にて手面を持って  
いる爲に逆になる敵仰向けた倒れる捧尻で脇を  
当込む

# 霞掛

相手方前と合しくつ刀にて我腹部に突つり来る  
 我左足左横一步削き体と転じ右手にて敵の刀持つ  
 右手面と握り左捧先と敵の右下腹部と持つて行き  
 捧持つ左手を敵の右手後ろ付根の二に持つて行き  
 右足と廻れ指に作ら転じる時は敵の右腕捧で逆押すと  
 なる其ま、右足利き堅く押へ込み

# 行違

相手方も左我より左の方行違ふ時敵は忽ちかくし以てたる  
 刀にて右横に我れと切らんとす我れ左足一步左へ体と  
 削つて左手其ま、右手肩の處へ左横下にて刀を度  
 ける同時に入一歩左足左へ斜に体と転じて左手放  
 ちて左捧先敵の面部と打つ

# 顔碎

相平方小刀我が腹部に突き来る  
我左足一歩左へしと体と軋じ左捧の目と捧申直の  
處に付べらせて右捧之つて敵の小刀持し小手打つ  
左手放ちし左捧之敵の顔面と打ち碎く

# 当返

相平方小刀大上段に切込みんとす  
敵一歩の進切込みと来るよ同じに我れも一歩右足一歩  
左足一歩し左手放ち左捧之敵の水月に出込む

# 坂落し

敵小刀我胸部に突入り来る  
我左足一歩左横前に歩の進体と斜めにしし左手右手  
肩の處に持つて行き右手は右側直直ぐに下に  
敵の小刀度け同時は敵の右側から後ろに流れて廻り

左手棒の中直まですべらして左手放ち左手棒を  
敵の左肩より首に廻し再び左手にて敵の右肩に  
出た棒を握り一寸腰を入れて棒で首を切つて  
後ろから脊を負い投げ坂落

# 中段型

中段型は棒無心の構無構じある

の手返

相手方大刀大上段我れは右手棒杖に上る姿なり  
敵大刀我面より切込み来る我右足右側に一歩開き  
て体より軽じ棒のまま棒を振る敵の下手打ち碎く

# 逆落

相手方前と合じく我れも前通り  
敵大刀我頭より切込み来る我左足一歩左へ開き

同時に右手棒左廻りして敵の横面を打つ

### 拵技

相手方大刀大と段に切込みしす  
の左の~~上~~を左廻りして打込みしす  
左廻りして敵の右面を打砕く  
一歩先に敵

### 外輪

相手方大刀時眠より逆反化して突込み来る  
我れ右足一歩右側に開きつて棒を右廻りして敵  
の二の腕を打ち込んで左手持ち流へ水月に突入る

奥

傳

### 一刀

相手方大の刀大と段切込み来る我れ右足右側に一歩開き  
て左足堅くして左手放ち棒下から繰廻りしす打砕く

# 返倒

足の通り  
膝下から繰廻し一歩打碎りきりて通す捧にて敵左  
足中廻り打碎り

# 跳落し

相手が力大と段大刀切込を来る  
我一步の左足左横に用いて右手捧をそのまゝ一歩廻  
拓肩から出して敵の両腕中一廻り打碎り

此の捧を後ろに持ちて来るまゝ一歩廻しと来るのは一歩程  
の練習があるが、これは此の寸手廻し、右左とも自由自在で  
が、之が未だ得ぬは、大刀の寸手廻し、意合抜きも自由である

# 股掛

相手が力大と同じく大刀の段切込を来る左足左倒へ  
一歩削り、其のまゝ、右手の一歩返り、一歩下から一歩敵

の小手打はる同時に再び小手を返して敵の股を打撃する下段科り

# 小手拂

相手方刀膝眼音代へ突入り来る我左足一歩左横に用くのと同時に棒そのまゝ小手返して右手右肩より棒の勢方いらる敵の両小手打込み小手返し顔面を打碎く

以上

天押雲命二十八代後夜因

熱田房綱(秀)

延元三年三月七日補正成名和長年と共た官軍に  
市味方寸 敵將上杉伊豆守 白田山修理大夫足利尾張守

并五萬余騎正成の軍略鬼神の如く綱秀武者五百  
余騎を以て馬六八角の棒と死草と振廻り五萬  
余騎の中に荒れ入る此の勢に五萬余騎の敵散  
るに敗れて死する者教知れず綱秀の棒雷走の如  
くと云ふ。

熱田小三郎頼綱  
出雲守頼長

高松左衛門督政俊  
伴太郎澄隆

四代略  
八代畧

荒木多門之介澄

荒木無人齋

荒木鉄平